

高知県坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

私のテーマ

「龍馬散策—龍馬の秘め事」

刈谷 卓弥



面上秘密にしなければいけないような中身は書かれていません。手紙の内容は、「腫れ物」を治療するときには十分に腫れあがってから針を刺さなければ治癒しないように、物事が成功するかどうかはタイミングが大切であるという趣旨です。しかし龍馬は人に見せては「けしてけしていかん」と口止めしています。何故でしょう。この手紙の裏側に龍馬の本心あり、それを乙女以外の人には知られたくない、との思いが感じられるのです。

この龍馬の手紙には心に秘めたものがある。しかし彼の秘め事とは何でしょうか。

時代背景から見れば、禁門の変・京都炎上の2か月前、長州が兵を率いて上洛しようとする攘夷熱の真っ盛りの時という状況を考慮すると、「今はそのタイミングではないよ」と言っているようにも感じられます。しかし私にはそれ以上に何かもっと深い秘密があるように感じられるのです。土佐勤皇党の同志にも言えない龍馬の本当の心の内が。それがどのようなものであったらうか、私は訪ねてみたい。

そこで幕末という時代を鳥瞰してみると、「攘夷」という言葉が竜巻のように現れ、暴威を振るい、突然消えていったような風景に見えるのです。明治維新以降「攘夷」という言葉は完全に歴史から消えてしまう。「攘夷」とは一体何なのか、不思議な現象です。

2. 攘夷とはなにか

言われるところによると攘夷という言葉は比較的新しく、ペリー来航の後に孝明天皇が伊勢神宮や七社七寺に賜った御教書の中で、「速やかに夷類を退攘し、国体に拘わらしむ莫れ」と記したのが「攘夷」の言葉の始まりでした。

天保年間には江戸幕府は「無ニ念打払令」を発し、黒船を見つけて次第無条件で打ち払うことを命じていました。ペリー来航の後幕府は開国に政策変更したが、水戸藩の烈公松平斉昭は井伊直弼の開国策に反対し攘夷論を強硬に主張していました。

しかし彼は、「われに戦うの決心ありて和するは即ち和なり、その決心なくて和するは和に非ずしてこれ降なり。」と攘夷を説明しています。要するに条約交渉は虚喝に怖気づいて行うものではなく、独立国日本としての自負と気概を持ってなされるべき、と主張していますが、その内容は松平春嶽・山内容堂が直接会って確認しているように、全面鎖国ではなく、必要な港は開いてもよいとする、条件付き鎖国の主張でした。あるいは拳を振り上げた手前面子があつて手を下せない状況であったように松平春嶽は回顧しています。

文久2年九月、長州藩を代表して幕府と交渉していた周布政之助は、幕府に「破約攘夷」を朝廷に奉勅するよう求めましたが、彼のいう攘夷とは「攘ウトハ排スルナリ 排シテ開クナリ 夷ヲ攘イテノチ国開カ

1. 散策の発端

元治元年6月、龍馬が姉乙女に宛てた「かの小野の小町が」で始まる手紙があります。「ねぶと論」で知られるこの手紙は表

ルベシ」との意味でした。つまり最終的には「国は開かるべし」であり、この時期の長州は無条件攘夷（「無ニ念打払令」）の意味ではなかった。この時期の長州はそれほど過激ではなかったように思われる。

一部肥後勤皇党のように無条件攘夷論もあったようですが、それが何故文久2年、元治元年に見られるように突然肥大化し過激化したのか、不思議な気がします。

3. 文久2年10月の幕府の状況

龍馬の秘め事は文久2年10月に勝海舟との初めての会談にその淵源があるように思われる。それはこの会談が彼にとってエポックメイキングな出来事だったことは明らかだからです。このとき龍馬に何かが起った。

あらためてこの年のこの月を振り返ってみると、9月には京都の朝廷が今年2度目の勅使を江戸へ派遣し、朝廷の意志として「破約攘夷」を幕府から朝廷に奏請するように要求することが決まっています。勅使の江戸到達時期は11月頃になる予定であり、幕府の本音では開港を奏請したいと考えていたが、長州藩などの「破約攘夷」周旋などもあり結論をだしあぐねて、侃々諤々の議論はするが結論はだせないでいた。

そんな中、10月1日、後見職一橋慶喜が開国論を展開し始めます。

「万国一般天地間の道理に基づきて互に好しみを通ずる今日なれば、独日本のみ鎖国の旧套を守るべきにあらず。故に我より進んでも交りを海外各国に結ばざるを得ず」

つまり国内の天理より「万国の道理」、国際法（万国公法）を優先すると主張する積極的開国論だ。この意見を朝廷の意に反して奏請すると主張し、幕閣はその理路整然、明快さに驚き、全員賛成します。松平春嶽もこの開国論を激賞するが、その後それに加えて、「朝廷が開国論を受け入れない場合は幕府は朝廷へ政権返上（大政奉還）する覚悟を定め」てはどうかと徳川慶喜に提案します。こうして「万国公法」と「大政奉還」のアイデアが日本史に初登場となります。

ところが10月中旬になって山内容堂は、「攘夷を奉勅しなければ、朝廷の攘夷が「攘将軍（討幕）」になるかもしれない」と持ち前の大声で恫喝してきて、幕議は攘夷奉勅にあつさと転換してしまいます。

このようにしてこのアイデアは一旦表舞台から退場するが、その後大久保一翁が「覚悟」ではなく「大政奉還をする」としてはどうかと提案します。幕閣の大部分はこれを聞いて冗談だと思ったのか突然大笑いしたそうですが、越前藩の資料によるとこの時、松平春嶽、横井小楠、山内容堂は本心から感心し、「他に策はない」と手を打った、と言います。

結局大久保一翁のこの意見は幕府の正式決定とはなりませんでしたが、海舟、小楠、一翁、松平春嶽（山内容堂を含めて）たちの胸の内ではこの後も密かに生き続け、翌年にも松平春嶽の意見として歴史の表舞台に登場してきました。

4. その時龍馬は？

それでは海舟と小楠の「攘夷論」はどうでしょう。同じころの勝海舟日記によると、

小楠曰く、「（略）それ攘夷は、興國の基を言に似たり、しかるを世人徒らに夷人を殺戮し、内地に住ましめざるを以て攘夷なり（無ニ念打払）」

「ぼれ話」

第2回全国大会にむけて

新年となると、さっそく現代龍馬学会の全国大会の準備がはじまる。

第1回目は4月に1泊2日で開催した。

しかし、今年の土佐は大河ドラマ「龍馬伝」で熱気が出しており、「五月のゴルデンウイークが終わるまでは落ち着かない」と云う。

五月中旬か下旬の桂浜で大会開催となると、土佐では若葉の香る季節。絶好である。ちなみに五月には桂浜では龍馬像の前で恒例の朗説会がある。司馬遼太郎著「龍馬はゆく」を龍馬ファンや観光客が像に向かって立ち、3分程度づつリレー朗説し、読みつながしてゆく企画がある。

第二回の反省から、会期は「研究発表」の1日だけとなり、夕刻の懇親会で閉めることになりそうである。

宿泊される県外からの会員は、「龍馬伝」イベント「満開の土佐路を散策するコース」を事前に決めておくとよいだろう。県内の会員たちは、ボランティアでお手伝いしてくれの方が多い。

毎月の例会の行き帰り、脳梗塞の後遺症で車運転を控えている私の「アシー」は、必ず会員の誰かが喜んで「交代でやってくれる。飛行機やバス、列車で高知に来て大会に出席される方で、県内各地をまわりたい方は、早目に見学先など会員同志が私に教えほしい。」お接待の土地柄でもある土佐の男女は、意外と世話を好き。場合には「ウルサイくらい」世話をするだろう。

さて、「一番お願いしたいは、皆様の「研究発表」である。
第二回は、「無理やり「発表者をお願いしたい」というのが、正直なところである。バイオアーティストを担った七人の侍の「紀要発表論文集」も、まもなく出来上がる。龍馬研究、龍馬関係人物研究、幕末研究、龍馬精神論……ジャンルも多彩で自由。これを参考に、皆さんとの「研究発表」(30分以内)をしてほしいのです。

新年を皆様の協力で、「知の殿堂」の基礎づくりをしっかりと願っています。

会長
永国 淳哉

コラム・龍馬のこと 日本でも誇れる風景

宮尻 千恵子

龍馬の変名に「才谷梅太郎」と「大濱清次郎」というのがあるがそれは、坂本家の祖先の出身地にちなんだり。この才谷は高知県南国市山間にある小さな村で、入ると1kmほどで初代の太郎五郎の墓所が左手小山にある。そのまま1kmほど進んだ行き止まりは「龍馬公園」である。奥に坂本神社があり2代目坂本彦三郎と3代目太郎佐衛門の2つの墓と家族が静かに眠っている。その墓碑の字が「坂本」ではなく「阪本」なぞは未だに解明されていない。因みに横須賀市大津町信楽寺のお龍さんの墓碑には「阪本龍馬之妻龍子之墓」と「阪」の字が刻まれている。建立には土佐出身の田中光顕(宮内大臣)も係わっているから間違はずはない。ではなぜ、謎は未だに「謎」である。

私がその初代の家約200坪を購入したのは26年前のこと、その日は龍馬像建立の日と同じ5月27日であった。古家「大濱屋敷」の手作り改装も私のこだわりで、長年かけ、家族や知人その他大勢の方の善意のもとすすめ、少しづつ今の(才谷梅太郎の里)の概要が出来上った。そこにはいろいろや五右衛門風呂、中でも好評なのが「オクト」でたくごはん。皆格別と喜んでくれている。けっこうウルサイ現代龍馬学会の永国会長にさえ「なかなかえいやいか」と気に入っていた。いる。

また、龍馬公園には100本以上の紅白梅がある。私はこの風景が好きだ。大きさではなく日本でも誇れる風景と言ってもいいくらいに思う。見るにつけ龍馬が「才谷梅太郎」の名前を好んだ理由がよく解るような気がする。生活道がやさしく手入れされ、この風景をさらに引き立てる。感謝。感謝。守り残すべき所が土佐にはまだ沢山残されている。

毎年桂浜の銅像前で実施する龍馬研究会の朗説会では、ここ才谷の山野の花々を活け、舞台を演出して楽しんできた次第である。では又。

でた時、パリパリに緊張した龍馬の心の奥に眠りこんでいた川田小龍の記憶、海への志の思い出が奔出したのではないでしょうか。まるで「ねぶと」のように大きく膨らんだ「攘夷」という言葉の風船へ「海」という言葉が針のように突き刺さって破裂し、風船の中から「海! ああそうだった」という思いが湧き上がってきた。このように想えるのです。

この頃海舟は海軍奉行並として人材育成が急務だと主張し、その人材は幕府内で集めるのでは間に合わない、譜代外様を問わず広く日本中から志のある人物を募るべきである、と声を大にして主張していました。ここに龍馬と海舟の接点が生まれた要因があったのではないかでしょうか。

「万国公法」と「大政奉還」のアイデアは海舟、小楠、一翁、松平春嶽たちの胸の内では密かに生き続けていたので、これがやがて龍馬の心に根付き、故郷の同志たちには言えない「秘め事」として生き続けていたのではなかろうか。

新年となると、さっそく現代龍馬学会の全国大会の準備がはじまる。しかし、今年の土佐は大河ドラマ「龍馬伝」で熱気が出しており、「五月のゴルデンウイークが終わるまでは落ち着かない」と云う。五月中旬か下旬の桂浜で大会開催となると、土佐では若葉の香る季節。絶好である。ちなみに五月には桂浜では龍馬像の前で恒例の朗説会がある。司馬遼太郎著「龍馬はゆく」を龍馬ファンや観光客が像に向かって立ち、3分程度づつリレー朗説し、読みながらしてゆく企画がある。

第二回の反省から、会期は「研究発表」の1日だけとなり、夕刻の懇親会で閉めることになりそうである。

会員便り

「変名 錦戸広樹」

皆川真理子

社中時代、陸奥宗光(伊達小次郎)が、錦戸広樹を名乗っていたことはあまり知られていない。ここでは、錦戸の変名が登場する資料をいくつか紹介したい。

神戸海軍操練所が閉鎖された後、宗光は、長崎で英語を学んでいる。唐通詞、何礼之の英学塾で学ぶ慶応元年の主要な塾生に、薩摩出身として白峰駿馬と錦戸広樹の名前が記されている(大久保利謙「幕末英学史上における何礼之?特に何礼之塾と鹿児島英学との交流?」)。

慶応二年正月には、京都にいる小松帯刀に、上杉宗次郎が自害したことを知らせる使者として、錦戸広樹が派遣されたことが、薩摩藩の長崎在勤の野村盛秀(宗七)と、上京中の薩摩藩家老の桂久武の日記に記されている。

「長崎丸明日出航之筈ニ付、錦戸廣樹差越候間、上杉一條等小太夫大久保氏へ申遣ス」(「野村盛秀日記」慶応二年正月廿八日条)

「西郷氏より書状到来、上杉宗次郎自殺一条小松家抱え錦戸広樹より野村宗七より之書状致持參候由ニテ、小松家より被相廻候とて到来」(「桂久武日記」慶応二年二月十日条)

錦戸の名前は、龍馬書簡にも記されている。長崎で、鹿児島へ向う三邦丸を下船した錦戸が、料から預かった手紙(多賀松太郎宛、慶応二年三月八日付)の表書き部分に「此書錦戸ニ頼み遣ス但シ太郎ハ又変名在之」と書いてある。

この手紙の「太郎」というのは、陸奥の最初の変名が「錦戸太郎」であったのを、「錦戸広樹」に変えたことを意味していると思われる。宗光の長男広吉が宗光の従弟、岡崎邦輔から入手したという慶応元年当時の集合写真には「錦戸太郎」とあり、「錦戸は先考也」と記されている(萩原延壽『陸奥宗光』)ことからの推測である。

能の演目「錦戸」には、ワキ方と「錦戸太郎」が登場し、錦戸太郎は奥州藤原三代秀衡の子国衡とされている。だが、『尊卑文脉』

では、秀衡の子頼衡が錦戸太郎とされている。「陸奥系譜」(陸奥宗光文書)によれば、頼朝の奥州征伐に出陣し、石那坂の戦いで戦功をあげたことで、陸奥国伊達郡を賜り、以後、伊達姓を名乗った伊達朝宗と四人の子息。そのひとり、為家が、紀伊伊達家の祖であるという。

宗光が、自身の先祖が亡ぼした藤原家の長男、錦戸太郎を変名にしたのに、どのような思いがあったのであろうか。

宗光の変名を追う事で、社中時代の動向が一部判明してきた。今後も新たな資料の発掘を心がけたい。

高知県立坂本龍馬記念館

〒781-0262 高知市浦戸城山830

TEL(088)841-0001 FAX(088)841-0015

<http://ryoma-kinenkan.jp>